

特集

盛岡駅・開運橋120周年!

盛岡の玄関口・駅前商店街のこれから。



今年11月に120周年を迎える開運橋と駅。
現在の橋は昭和28年に架け替えられたものです。

盛岡駅と市内中心部の間を流れる北上川。そこに架かる開運橋は、明治23年に盛岡駅開通に伴って造られました。駅から橋につながる界わいは、徐々に一つの通りとなり、盛岡駅に降り立つ人々を迎える玄関口として街並みをつくり上げてきたのです。そして、盛岡駅と開運橋が120周年を迎える今年11月に向け、盛岡駅前商店街にも新しい動きが見えています。



昭和54年頃盛岡駅前商店街より開運橋方面を望む

駅と橋のあいだにできた 小さな街並み

JR盛岡駅から開運橋につづく100メートルほどの通り「盛岡駅前商店街」。高層マンションの建設、不來方橋の開通、ビジネスホテルの建設など、駅周辺の街並みが大きく様変わりしていくものの、毎日通勤通学者が行き交う駅前らしい風景は変わることがありません。

その人波を、開運橋付近にて毎朝夕見守る店「シューズモリ」は、昭和8年創業の老舗靴店。幼い頃をこの場所で過ごした同店の会長、森雄一さんは戦前の思い出をこう語ります。

「私が小学生の頃は、駅舎も大正浪漫を感じる佇まいでね。やん

ちゃん子どもが集まって駅の裏側に続く機関区を越えて駅員に叱られながら、雫石川まで遊びにいったものです」。

駅前周辺は、当時長屋が多く建っており、森さんは、狭い路地を使ってかくれんぼなどの遊びに没頭したそうです。終戦を間近に、この一帯は昭和20年3月10日に空襲を受け、駅前には森さんの店を含み、ほとんどが焼け野原となり、被害から免れたのは数軒だけとか。貧しくて物資の少ない戦後以降は、隣近所がお互いに助け合い、夕ご飯のおかずをやり取りしたり、お風呂に入れてもらったり。

盛岡駅周辺では、貨物配送や手荷物預かり所、旅館、貸し自



「シューズモリ」は今年で創業77年。現会長森雄一さんは二代目にあたります。かつて、製靴職人だった森さんのお父さんが、この場所で一足ずつオーダーを受けて靴作りをしたそうです。

転車屋などサービス業を中心に商売が発展していったといえます。

「駅前ではサービス業か、近隣住民の生活周りの日用品を扱う商売がほとんど。橋の向こうに買い物に行くことはほとんどなかったですし、皆、この周辺に住んでいたから仲が良く一体感があってね。当時、岩手公園で市民運動会が行われたのですが、駅前地区が優勝していましたよ。思えば、子どもだけでなく大人同士のコミュニケーションがあった時代でした。」

と、森さんはかつての生活を懐かしみます。

駅前ならではの賑わいを大切にしたい

昔に比べ、駅前に住居を持つ人たちは随分少なくなったようですが、変わらないのはやはり人の賑わいです。出張等で他の地域に出かける機会が多い森さんは、駅前に活気のない寂しい風景を目にすることも少なくありません。

「他地域に比べ、盛岡は駅から開運橋に向かっていつでも人の波が続いている。駅前の賑わいを見るとほっとします。でも、住んでいるとそれが当たり前に見えてくるんです。モノを買っ

てくれるかどうかは別として、駅前に人の賑わいがある。そのことを、もっと誇りに思うべきかもしれませんね」と、森さん。

小売店がさほど多くない駅前商店街ですが、開運橋があることで人の流れが変わらず、景気の良し悪しに左右されない賑わいが続いてきたのかもしれない。ここ数年では、開運橋でNHK連続テレビ小説『どんど晴れ』のロケが行われたこともあり、周辺を歩く観光客も増えたようです。それを機に、盛岡駅前商店街振興組合でも、もつと街を盛り上げようと、数年前からイベント開催、開運橋のキャラクターづくり、街をきれ

いにする活動などを続けてきましたが、さらに今年はこの動きがあるようです。

もうすぐ盛岡駅と開運橋120周年

今年11月に、盛岡駅と開運橋は120周年を迎えます。そこで、記念事業を計画するにあたって、駅前商店街振興組合が事務局となり、「開運橋120周年記念事業実行委員会」を立ち上げました。駅周辺の各町内会、商店街、盛岡駅、マリオスロウド地区協議会や盛岡ターミナルビルなど、周辺のさまざまな事業所や組織が、地域の一つの組織形態で動き出したのはこれが初めてのこと。

初めてのこと。

「以前から、地域間で、あるいは商店街の会員たちで行うイベントや活動はありましたが、これだけさまざまな事業体や組織の人たちが、一堂に会すること自体が初めて。それは、今後駅周辺振興の活動を進めるにあたって、とても大きな意味あることではないかと思えます」と、同実行委員会の石田

和徳さん（盛岡駅前商店街振興組合理事長）は話します。

実行委員会の立ち上げは、今年の3月でした。すでに年頭から「今年は何かを仕掛けよう」という機運が盛り上がり、各地域の方々に声をかけていったのだそうです。盛岡駅開業に関しても、駅を中心に「東北本線開通120周年事業」と銘打ち、別の事業企画を進めています。お互いの領域で記念事業を考え、協力しあいながら相乗効果で賑わいが出せれば良いと、石田さんは話します。

開運橋120周年に関しては、10月22日(金)に、開運橋の点灯式を開催。また、23日(土)は、記念事業として「開運まつり 木伏(きつぷし) 緑地事業」を予定しています。桜の植樹、芋の子汁の振る舞い、もちつき、地域と連動したアトラクションなど、様々な世代の人が集まるイベントを企画。これは、開運橋付近にある木伏緑地を、地域の憩いの場として広く知ってもらおうための試みでもあります。

記念事業を機に期待する駅前のこれから

開運橋120周年は、一つのお機。東北新幹線開通以降、盛岡駅前に居酒屋を開店して30年近く、駅前の振興に努めてきた



市街地に向かって開運橋の左手にある、木伏緑地。「木陰が心地よく、もつと地域住民や観光客に利用してほしい」と、石田さんは話します。

店主の一人として、「賑わいあふれる盛岡駅前通りの強みを大いに活かし、街や地域の垣根を越えて記念事業計画をスタートできたことが何よりの収穫」と、石田さんは微笑みます。商店街会員や実行委員会のメンバーの中では、30、40代の若い世代も積極的に活動しているとのこと。これまで戦後の街づくりに力を注いで来た創業世代と若手を結ぶ石田さんは、大事なつなぎ手です。

「若い3代目や4代目にバトンタッチするためのリリーフだから、いい状態でこの街を引き継ぎたい」。石田さんはそう話しながら、街を行き交う若者の姿を見守ります。

取材／SANSAN企画編集委員会